中川根ふる里通信

＝ 第48号 ＝

編集・発行・モア・ラブ中川根
連絡先 〒428-03
静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6
中川根ふる里通信係
TEL.0547-56-0015
郵便振替口座 00870-4-81556

山の贈り物を届けたい・・・
―風に乗せて、水となって。

新緑の山犬段より

鈴木　久さん

中川根町長が 鈴木　久さんから 上野虎徹さんへ バトンタッチされました。

上野虎徹さん

二月十五日、任期満了に伴う中川根町長選挙が行われ、新人二人の選挙戦は、徳山地区の上野さんに軍配が上がりました。上野さんの町政への熱き想いは、三度の挑戦で見事達成されました。

おめでとうございます。

中川根町も全国地方統一選挙と同期に町長改選が行われておりましたが、任期途中で退任された方から十六年、二月末の任期となっている様です。

この時期は年度末でもありますから、来年度予算や事業の計画が立案されておりますから、この意味合いからも鈴木町政からのバトンタッチは、スムースに行われた模様です。

鈴木さん、二期八年の町長職、本当に御苦労様でした。町づくりの目標のトップに掲げられた『安全で安心できる町づくり』の実践に力を入れられ、道路整備や上水道の整備、安心して生活できる救急体制を備えた常備消防の確保、住民の足となる町営バス事業の開始など、町民誰もが必要とする生活環境の改善をされて来られました。

又、中川根が町制を敷かれた当時の町長、鈴木七蔵さん（故人）とは親子の間柄でおられますので、四十年足らずの間に町長職を二期ずつ務められました。改めて鈴木さん二代に渡る中川根町への功労に感謝させていただきます。

ありがとうございました。

上野町長就任の二月二十八日は、大井川鉄道にSLがふたたび走って二十余年〝全国SLサミット〟が、静岡県・大井川鉄道域四町（金谷・川根・中川根・本川根）を中心に催された日と重なりました。上野町長の名を全国に広める、良いスタートとなりました。

三月の町議会に於ても議案が承認成立され、新しい年度を迎えました。四月当初から「茶時前に、町民との話し合いを持ちたい」と、町内十五地区を夜間巡回する『町政懇談会』が開かれ、町長就任の挨拶、町の施政方針の説明がなされ、地区民との意見交換が行われました。地区の実状なども汲み取っていただけたのではないかと思います。上野町長の実行力と判断力、何にも増して、元気な姿に、高齢社会、農林業の低迷、先の見えない不況の現状に、「何か、やってくれるのでは」と期待して、町政をゆだねます。

就任のごあいさつをおおくりします。

皆さんこんにちは

私はこんな町づくりをしようと思います。

一つ目は、大井川推積砂利のことですが、大切な資源になると考えます。他町の様子をご紹介しますと、本川根町は、町の直営は出来ませんので、別会社を作り実質的には町で経営しています。井川では森林組合が砂利採取を行って林業経営上足らざるものを補っています。そのようにそれぞれが考えて資源を生し有効的に活用しています。

当中川根町も砂利採取業者が県に納めている納付金を町に納めてもらうよう町民の皆様のご協力を背景に努力してまいります。

二つ目の問題は大変子供が少なくなりました。現在町内に小学校が三校あります。一校でも収容できる状況にありますが、急速に進めることを避け、三校を二校とし、一校を老人施設に改造します。改造も大きな支出は必要ないと思います。県とか国も建物を転用することですから願ったりかなったりではないでしょうか。民間ではどの家でもやっていることで、施設が新しくその為に造った施設よりも町民の皆様の誠心でささえた施設がどんなにか利用された方の心に残ることでしょう。

国民年金の範囲で利用できる施設にするには、定年で退職された方々のお力を借りなければなりませんし、順送りになることは当然の人生の繰り返しです。誰も例外ではありません。そのことを皆さんしっかりととらえご協力をお願いします。

三つ目のことは、将来出来る静岡空港下を新幹線がトンネルで通っています。空港を造ることは、大賛成で、地域として強力に県を応援しなければなりません。まして、新幹線地下駅が出来ることになれば、地域にとりまたまた大変なことで、何か中川根にも夜明けが来た感じです。若い人達にも大きな夢と希望を与えることでしょう。

その地下駅に大井川鉄道が接続することも夢ではなく、やれば出来ると思います。榛地四町、大井川鉄道が一つになって推進することです。昭和七年に、金谷より千頭まで大井川鉄道㈱が鉄橋を架け、トンネルを掘り、四十キロの長きにわたり全通させたことを思うと、本当に夢でしょうか。誰かがやってくれるでなく、中川根町の未来のため、今の皆様が実現に努力することです。

以上は今すぐ大きな支出を必要とすることではありませんが、町民の皆様が心に深くとめ、ご協力をいただくことであります。

当面することとして、嫁不足の問題、高齢者の方方のデイサービスセンターの建設スタート、宅地造成事業、国道、県道、町道及び上下水道の整備、子供の遊び場の確保、学校教育の現場の事等関係の皆様の協議の中で解決策を見いだしていかなければなりません。

＝広報・なかかわねよう＝

河村計三さん逝く

二月四日立春、町の文化の灯だった河村計三さんは、静かに来世へ旅立たれました。その日は河村さんのご容態を案じながら近びくになっていた、町史研究会の学習日でした。町の大切な宝物を失ってしまい誠に残念でなりません。深く哀悼の意をささげます。

河村さんは町史研究会のリーダーとして、まっ先に立たれ、町の歴史を探求され会を発展されました。又二年ほど前より始められた町史編纂（近現代編）専門委員としても活躍され、今後も最も信頼されるなくてはならない人だったのです。

町を訪れる歴史文化に関する学者諸氏への応待も一手に引受けられ懇切丁寧に的確に対応され専門家の方々からも一目置かれておりました。

特に中川根を中心とした駿遠地方の中世から戦国時代の歴史の開拓には並々ならぬ時間と心血を注がれました。南北朝のころ、後醍醐天皇の皇子宗良親王とその皇子にまつわる伝説と史実、土岐氏と徳山城の戦い、島田智満寺と同じ山号寺号を持つ河根千葉山智満寺の研究、曹洞宗に改宗されてからの、羽鳥（安倍城）信州猫檀家（大河原城）の関係、北遠の武将天野氏、奥山氏のこと、など、数えれば数に限りがありません。

又、数年前からは、町内旧家の古文書の解読に情熱を注がれ、解読された文書は、「誰が見ても判るようにして置かなければ」と、分類整理されております。この仕事は普通の人ではとても出来ない大変な作業です。河村さんは独学で古文書が読める様に勉強されたのですが、河村家は明治以前代々漢学等の塾を開いて、人々に学問を教える家柄に育ったことも、古文書を始め、歴史学等に入魂する由縁ではなかったかと考えます。古文書を教える唯一人の先生でしたのに、残された生徒は唯迷うばかりです。

十年ほど前から、町史研の学習資料として、又河村さんご自身として、手製の出版物（冊子）を発刊する様になり、その数は十冊をこえました。最近はご自身の想い出の記録『揺籃の譜』以之章、呂、波、仁、保、部之章、附山大の話を自筆で書かれました。そして『方言集』が平成十年に発刊されます。揺籃の譜はいろはから、せすんまで、続く予定だったでしょうし、方言集は、「情報化による言葉の氾濫は昔から地方に伝わる話し言葉が消えてしまうかも知れない。東北弁や大阪弁は五十年後も多分残るだろうが、川根弁は残らないだろう。今のうちに後世に残しておかなくては……」と、将来のことを考えての出版でした。入院中書かれた『発刊の言葉』が最後の筆となりました。

残された者（町史研等）が河村さんの目指したものへ、どれだけ近づけるか判りませんが、河村さんが教えてくれた歴史や文化、民俗学等を守り温めることが、ご恩に報いることになると思います。

改めて揺籃の譜を手にしてみますと、河村さんの温かな心にふれる気持ちがします。ふるさとの「匂い」をのせた仁の章をご紹介いたします。

楚籃の譜

仁之章（23）

河村計三編　つくしクラブ刊

終戦後間もなく山村の一般的傾向として、すぎ、ひのき、の植栽が始まり、地域によっては、ほとんど雑木林が見られないまでに、徹底した植林がすすめられ、森林組合などを窓口として、補助金なども交付する仕組の奨励であったから、その成果は、視界を一望すれば、直ちに納得し得るまでに山容を一変させてしまったのであった。

春野町や川根町の山深い地域では、またまた昔ながらの椎茸栽培を、伝統的な林業の基幹とみる習慣が受け継がれていて、そこでは植林一辺倒ではなかったあかしでもあるかのように、椎茸のほだ木（原木）の雑木林が見られ、春秋の味わいを満喫させてくれる。今では数少ないノスタルジアな風景として残されている。

太古の匂いを想像させる雑木林の匂いは、それ自体、今では貴重なもので、大自然の匂いの特級品であることは勿論だが、私の生まれた大正年間では、既に若干の植林が伐期に入っていて、集落の周辺でも、すぎ、ひのき、の丸太が売買されていたようだから、そのとき切り捨てられた、枝や梢のみずみずしい、そしてどこか鼻を刺すような強烈な樹脂の匂いが、風むきによって村中にただよい、木材が搬出されてしまってからも、この匂いは消えることなく、朝夕なに、かなり長期間、峠に点在する全世帯の納戸の奥まで浸入してきたものである。従って、この当時生まれた「納戸の住人」赤ん坊にとっては、本能的に、なにか懐かしみのある匂いと言うことが出来るような気がするのである。

若葉の季節になると、いわゆる薫風にとって代り、主役の座につくのが、この地方では茶園の匂いである。「馥郁」という文言は、往々にして、花ばなの香りに代表されるが、お茶の匂いは、花以上に深く重厚さがあるように思う。たとえば、花の香りにプリマドンナの華麗さが連想されるとすれば、茶の芽の匂いは、沈黙の思索をわずかな動きによって表現してゆく「能舞台」の雰囲気を想わせるものがある。地味ではあるが、その風格の高さは、花の比ではないと言えるだろう。しかし一般的には「するが路やはなたちばなも茶の匂い」とした芭蕉の句は文句なく標準感覚を代表していると思う。

そして更に、茶工場から流れ出てくる匂いは、微風に乗って、急坂の畑を駆けあがり、峠のわが家まで運ばれてきたが、いま想えば子供ごころにも、なにかが、なにかによって、村中がせわしなく動き始める季節の匂い、という漠然とした感じがあったように想い出されるのである。

春から初夏にかけての山の匂いは、複雑多岐で、とてもこれを、いちいち分析する知識などないが、それらは、鳥獣や虫たちの、発情生殖をうながす匂いがあり、色彩があり、温度があり、音声などがあってそれぞれ、さまざまな状態で自然の営みとなって展開するのである。

お茶が終ればもう夏である。いつの間にか大人の背丈以上に伸びている雑草の匂いは、野といわず、山といわず、むせかえるような「草いきれ」が昼凪ぎの強烈な太陽に灼かれて、一層人びとの肌に、汗をふき出させたものである。それでも峠という地形の救いは、盆地のそれより平均して風の吹く率が多いから、比較的凌ぎ易いと言えるはずである。

真ッ紅に、ただれたように焼けながら、はるか、西方の秋葉山の頂上に、たどりついている真夏の太陽は、まともに眺めても、最早、それらしい眩しさも、輝きも無くなって、あたりも、すっかり涼しくなってしまい、村の家々や、人びとの顔だけが、ひときわ赤く、夕映えに染っていたのを思い出す。

夕食も終って大人たちと、前の往還（道路）へ涼みがてらの散策にでかけると、そこには夏の宵の冷えた青葉の匂いがあって、一日の疲れを癒す最高の天然クーラーが、期待どおり、ずっと下の、杉川の「せせらぎ」のかすかな音と一緒になって吹き上ってくるのである。雑木林の梢を、そよがせながらの微風には、甘く、むせぶような栗の花の匂いなど、特に印象ぶかいもののひとつである。ずっと下の茶工場の前に並んでいる栗の大本が、一斉に花盛りになると、この甘美な匂いが幾日もつづくのだが、しばらくすると、ふと、いっとき、山百合の香りなどもまじってきたりして、夕涼みを楽しませてくれたものである。――中略――

幼少のころは、専ら子犬を相手に走りまわった時代で、村の周辺の山野を、無差別に駈けめぐり、路なきを路とし、手足ともに「なまきず」の絶えることは無かったから、夜ともなれば、すっかり疲れはてて、夕食もそこそこに、炉辺に近い母のひざを枕にして、囲炉裡の火などぼんやり眺めているうちに、やがて焦点が結べなくなり、自在鉤の薬缶のかなでる子守唄を聞くともなしに、眠ってしまい、その一日が終るのが平均的なパターンであったと思う。

「三ツ児の魂百まで」というが、山深い地方特有の囲炉裡の「煙くさいムード」は郷びた育ちを語るかのように、生涯、抜きがたい体質となっていることは否めないと思う。老境に入って久しい今日、なおロマンチストじみていて、いささか気はずかしいが、その山の匂いに、半ば本能的とも言える郷愁をおぼえるということは、いつにかかって、かの「納戸の住人」として、呼吸を始めた一個の生命体の「ゆりかごの匂い」と言わざるを得ないようである。

だが、それにしても、年々歳々増大してゆく人工林をみていると、これこそ現代先進国の経済構造がつくり出した「ひずみ」であり、超大型のしかし徹底した自然破壊にほかならず、その植林と同時に始まった「木ノ実」の無い山の飢餓によって、永住の地を捨てて逃げ去り、果ては絶滅の悲運に追いこまれつつある、もろもろの鳥獣たちの環境に、われわれは、もっと注目すべきではないだろうか。

地球はひとり、人類だけのものではないと言う思想が、二十一世紀の常識であってほしいと思う。

さて、以上、この章で述べた山の匂いは、ほんの一部にすぎないが、人工林では発生することがない匂いであることは、間違いない。そういう感覚から言えば、鳥獣たちの代弁ではないが、山に関する限り、

「すべてのものの母なる雑木林よ、
　そのかぐわしき香りよ、汝のみが自然である」

とでも言おうか、植林全盛の現代からすれば、このような自然礼讃も、見ようによっては「反骨のつぶやき」と、人は言うかもしれない、が、しかし、誰がなんと言おうと、私としては、これが正直なところである。

――後略――

余録

河村さんの生家は川上村杉峰、現周智郡春野町高杉、高校生の研修施設〝山の村〟のある所です。

全国高等学校文化連盟「将棋」
新人大会 準優勝
藤原 崇子さん 地名

昨年十一月の県予選で優勝。二十八道府県から八十一人が出場した一月の新人大会では決勝進出を果たした。強豪伊那北高（長野県）の吉田選手に敗れはしたが、堂々の準優勝。藤枝明誠高二年。十七歳。

――将棋歴は。

「一年の六月に、先生に勧められて将棋部に入ったのが最初です。それまで全くやったことがなく、こまの動かし方から覚えました。男子と試合をしてもずっと勝てず、悔しい思いをしているうちにのめりこみました」

――大会を振り返っての感想を。

「昨年の新人大会は一回戦敗退。ことしはとにかく勝ち進もう、と思っていました。でもここまで行けるとは――。準優勝はすごくうれしいです」

――決勝戦は昨夏の雪辱戦だったそうですね。

「吉田さんは昨年夏の全国高校選手権で優勝した伊那北のエース。同大会の団体準決勝で対戦し、負けた相手です。雪辱戦の意識はかなりあったんですが……」

――次の目標は。

「まず春の選抜大会で、今度こそ吉田さんを倒して優勝。それから、夏の選手権で伊那北の八連覇を阻止したい」

顧問教諭は、藤原さんを、将棋は堅実で攻撃的。今大会で「勝ち方を覚えた」というだけに、今後の活躍に期待がかかる。

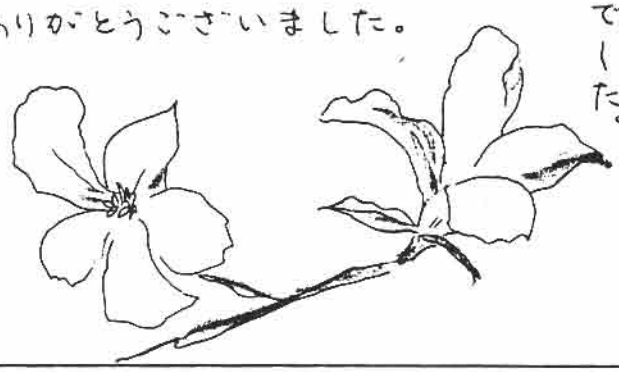
二月十九日、静岡新聞『この人』より

藤原さん、おめでとうございました。今ごろ、夏の大会を目指して、修業中ではないでしょうか。

さて、昨年末から今春にかけて、志太、榛原地区の高校生が大活躍しました。当地区は、日本の中心、つまり、ヘソと名付けられております。「日本のヘソの若い力は、充実していた」とても、うれしい話題でした。

- 全国高校駅伝大会出場
  男子 ＝ 藤枝明誠高
- 全国高校サッカー大会出場
  藤枝東高
- 春高バレー 出場
  女子 ＝ 島田商業高
- 春の選抜野球大会出場
  島田商業高

まだまだあったかも知れません。
県代表として、頑張って下さって、
ありがとうございました。



未来に残そう 豊かな流れの大井川

その3、私と大井川（寄稿）

榛原高校教諭 中村 肇さん

金谷高校在職二十四年間に、郷土史研究部顧問として、大井川筋にかかわるテーマを主な研究対象として来ました。「大井川和紙復元」「大井川と水」「大井川の砂利問題」「大井川と木材」「大井川筋の落人伝説」「川根筋の街道」「川根筋の林業の現況」「大井川と大井神社」「大井川筋の神社仏閣の統廃合」「川根筋の冠婚葬祭」「郷土の鉄道―大井川鉄道・井川線」「大井川筋の水車」「大井川用水前史」「大井川の徒渉制」等です。

また静岡県の調査員としては、「東海道金谷宿・島田宿」、「諸職調査」で川根三町の職人さんの調査を、「民謡調査」では、中川根町・川根町・金谷町の民謡を、「坂京・田代・青部の神楽」では、これら村々の歴史を中心に報告書を書かせてもらいました。また現在は本川根町史民俗編にかかわっています。

このようなことからも自然としての大井川と、これにかかわる人々、及び文化と歴史について、見て来たわけです。

この中で何と言っても重大なのは、大井川の水問題です。大井川上流の田代ダムから毎秒五トンの水が山梨県の早川に取水されています。昭和六十三年に全国で初めて塩郷堰堤から毎秒五トンの放流がなされることになったものの、上流部に十五もあるダムによって、土砂はダム湖上流部に堆積し、やがてダムそのものに堆砂し、ダム機能を失わせ、ダムからダムへは山々に貫いた導水管で水が流される為に、大井川の河床には沢水がわずかに流れるだけとなり、川霧が立たなくなり、名産のお茶や杉・桧にダメージを与え、更にいわゆる河原砂漠を生み、太陽により熱せられた河原石の熱風が砂塵を巻き上げ、この照り返しが植物の生態系に影響を与え、一方大井川に生息していた魚介類、昆虫等も姿を消すか、大幅に減少してしまったのです。また自然を求めて奥大井に旅する人々にとっても、水の無い大井川を見せられては幻滅感を味わうことになります。

奥大井の降水量は年間三〇〇〇ミリと言われています。しかしここ数年間は一五〇〇～二〇〇〇ミリが良いところで、この水の分配が今後の大きな問題になって来ます。水源である大井川中流部では、飲み水さえも沢水を利用した簡易水道に頼っている状況なのに、下流部では第二東名、静岡空港、小笠山開発、工場誘致等々開発が盛んで、有力な遷都候補として遠州地方も噂されています。

こうした時に考えなければならないのは、水の分配問題です。長島ダムにより現在より更に広域

に分水されることは、水不足に悩む下流部には福音になります。しかし、このことは中流域に住む三川根町民ばかりでなく、大井川下流域の金谷町・吉田町・島田市大井川町・藤枝市等の人々にも大きな影響を及ぼします。既にこれらの地区では、豊富であった伏流水が減少し、沿岸部では塩水化現象や、土砂供給が無くなったためと水圧の減少により、海岸部の侵食が大問題となっているのです。

ダムの堆砂や、河床の上昇はマイナス要因ですが、これも対策次第では宝の山になるのです。大井川の砂利は酸化ケイ素（シリカ）が少なく、コンクリートの骨材として利用するには最適です。アルカリ骨材反応が無く、しかもほとんど無尽蔵に供給されるからです。

静岡市井川の森林組合では、井川ダムの堆砂を浚渫して、これを砂・微利・砂利・玉石等に分別し、村内の建設業者等に販売して、経営を維持しているのです。また中部電力㈱は赤石ダム・二軒小屋ダムを建設する際に、畑薙ダムの堆砂を骨材として利用しましたし、大井川流域には、こうした良質の砂利、砂を県の指導に従って採取しているのです。

しかし、問題もあります。ダム湖からの採取は現地利用に限られていますし、また中流域から採取しても下流に運ぶにはトラックを使用するしか方法が無く、道路事情、生活環境に悪影響を与える上、砂利等のコストも上がるからです。大井川鉄道のトロッコ等の活用も考える必要があります。

現在川根三町では、それぞれの町で「町史」が編纂されています。川根三町は現在では異なった行政区ですが、縄文時代の遺跡、戦国期の土岐氏・今川氏・武田氏の攻防戦と、これに関わる山城等、川根筋の街道、江戸時代の大井川の徒渉制、川根筋の神楽、廃仏毀釈による影響、産業と生活、冠婚葬祭、年中行事、人生儀礼等々は共通に扱うべき内容が多いようです。本来は「三川根町史」もしくは「大井川中流域史」にすることが相応しいと思うのです。先人の築いた歴史・文化・産業を見直させ、都会生活でゆとりを無くし、自然を求める人々、日本人が失った「原郷」を求める人々には、やすらぎを与える場なのです。最終的に島田川口、相賀で広域に給水するとしても、大井川中上流域に水を戻し、本来の自然に近い環境を取り戻す必要があります。

大井川筋の開発や環境維持は、地域住民やこれに協力する人々だけで出来るとは思えません。明治二十七年以降は、大倉喜八郎による大倉組（後の東海パルプ㈱）、島田の加藤組、平口組の奥山への進出により、大井川の木材が伐採・搬出され、東海パルプは現在では社有林の伐採よりもこの維持管理に努めています。中部電力㈱も昭和二十七年に電力会社を合併して設立されて以来、発電所の建設の他に、この地方の水害対策・道路建設等に努めて来ました。水力発電は夏場の電力不足の際の供給に不可欠ですが、効率的にも水力に頼る時代は過ぎましたから、原発の安全性が確立されれば、これからは大井川流域住民の要求と折り合いをつける必要も出て来るでしょう。

その日は、案外近いかも知れません。

東京のかたすみから（二十一）

❀テレビの始めから終りまで これは拉致されたのではない、私があげた

渡邉賓夫

最近、北朝鮮の食料不足や、少女拉致事件などが話題になっているが、昨年十一月八日には『日本人妻帰国に湧く』が報道された。

朝鮮人というと私の頭に浮かんでくることがある。昭和十五、六年ごろに、旧中川根村の久野脇発電所建設のために、働きにつれて来られた若い朝鮮人の労働者（当時は半島人と呼ぶように言われていた）達や転入学してきた工事関係者の子供達のことである。

私が小学校四年生だったある秋の夕方、大井川鉄道下泉駅に降りた五、六十人の一団が、二列縦隊で三キロの道のりを高郷へと歩いてきた。カーキ色（国防色）の真新しい国民服を着て、日焼けした青年達を、私は興味深く観察した。彼等にはなぜか笑顔や明るさと言うものが見られない。履き物は、親指が分かれておらず、つま先の丸い地下足袋で、いわゆる朝鮮靴と呼んでいた物で、私は初めて見た。

それまで、私達家族が使っていた建物を父が提供し、彼等はそこで生活を始めた。紙を使わないで、指先で押えて飛ばす「手鼻」で鼻をかんで、瞬く間に便所の板壁は一面にそのかたまりが付き、兄嫁の『こんさん』が汚い汚いと言ったことを覚えている。私の耳に残っているのは、彼等だけになった時に口ずさむ、「アリランの歌」で、意味はわからないが、その淋しい調べは、何となく郷愁を感じさせた。終戦後、彼等はどんな生活を送ったのであろうか？

あれから四十年後の昭和五十五年の秋、当時の若者を思い出させるような一行に出会ったのである。ソ連や北朝鮮などの共産圏と「交流が深い」朝日新聞社

拉致疑惑解明求める

与党訪朝団　北朝鮮「里帰り継続努力」

【平壌12日＝杉山祐之】自民、社民、新党さきがけ三党の与党訪朝団（責任団長・森自民党総務会長）は十二日午前、平壌市内の百花苑招待所（迎賓館）で、朝鮮労働党の金養建国際部長らと全体会議に入った。

この中で、森氏は「拉致疑惑解明に向けて具体的な協議を進めたい」と述べ、日朝国交正常化の障害となっている日本人拉致疑惑問題で、北朝鮮側に疑惑の解明を求めた。

これに対し、金氏は「これ以上、ごねて取り上げないではすまない」とやっちゃあで、

読売新聞 98.11.12

日本人妻、再会の歌声

きょう故郷訪問

うさぎ追いしかの山」。四十年ぶりの再会で、唱歌「故郷」を歌い、日本人妻もいた。朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）から里帰りした日本人妻ら日本人配偶者十五人は帰国二日目の九日、宿泊先の東京・代々木のオリンピック記念青少年総合センターで、訪れた親族・知人、同級生らと数十年ぶりの再会を果たした。

日本赤十字社によると同センターに面会にのぼる計三十六組八十人。発表された名簿を見て、取り出した親族もいたとき。きょう十日からは二の日程でそれぞれの面会を訪問し、懇談。

読売新聞 98.11.10

朝鮮食糧事情

「依然、絶望的な状態」

国連食糧計画事務所長と会

クーツ・WFP北朝鮮事務所長

【平壌8日＝白川義和】国連世界食糧計画（WFP）のダグラス・クーツ北朝鮮事務所長はこのほど、平壌市内で読売新聞と会見し、「北朝鮮の食糧事情は依然、絶望的な状態が続いている」として、行っている国連の食糧計考えを明らかにした。

同所長は、同国の足恒常化について、干ばつなど自然災とする北朝鮮側の解を示す一方で、される多くの食糧

読売新聞 98.11.9

からの依頼であったように思うが、テレビ朝日の報道スタジオを見学したいと言うことで、現場の私達が準備をととのえて約束の時間にスタジオで待っていると、北朝鮮政府要人と軍部高官（軍服を着ていた）数人が現れた。

事務的で儀礼的な挨拶のみで特別に会話を交わすこともなく、用意しておいたデイリイ・ニュースコーナーのセットやキャスター・ニュースコーナーのセットなどの説明に入った。

テレビ局のスタジオは初めてなのか興味深かげに聞き入っていたが、特にテレビ画面の背景（バック画面）の絵柄を変えるスクリーンプロセスの動作は面白かったようである。

最後に天気予報のセットを見せた。当時は、現在のようにコンピューターグラフィック（CG）による表示ではなく、すべて手づくりの小道具を使用していた。日本地図はボード（ベニヤ板）に画いて切り抜いた物を使い、『はれ』『くもり』『あめ』マークのカードは一枚一枚丁寧に描いたものを切り抜いて作ったものであった。それらのマークを、実際に天気を想定して、日本地図の上に地域ごとに並べて見せたところ、彼等はこれに大変興味を示し感心して見ていた。

帰り際に、このうちの一人がお日様を描いた『晴れマーク』を是非欲しいと言うのである。今までも、中国のテレビ研修生には、放送設備の図面をやたらと欲しがるので上げたことはあったが、放送用小道具をくれと言われたのは初めてで、珍しいお客さんだなとは思ったが、私は気軽に『晴れマーク』五・六枚と、ついでに『曇りマーク』『雨マーク』もおまけにすしあげて、玄関で彼等を送り出した。

暫くしてスタジオへ戻ると、間もなく放送に入る「明日の天気予報」担当者が大騒ぎしているではないか。「晴れマークが無い」、「晴れマークが無い」と。担当者の説明によると全国が晴れの日を想定して、全国四十地区の分として、四十枚の晴れマークを作って常備していたのだという。曇り、雨マークも同様に四十枚ずつ用意してあった。翌日はたまたま全国快晴の予報が出て、四十枚全部が必要とのことで、担当者が大慌てで探していたのである。

現場の真剣な雰囲気に圧倒されて、今更、私が北朝鮮へプレゼントしたとはとても言えず、失敗したと思ったが、どうしようもなく黙ってスタジオを去り部屋へ戻った。やり切れない気持ちで落ち着かず、身の置き場も無かった。

当時テレビの大道具、小道具類は使いっぱなしで、次に使うまでスタジオの片隅にゴロゴロしており、問題のマークもそれほど大切なものだとは思わなかった。それに足りなくて困れば、美術の専門家が大勢おり、簡単に素早く作ってくれるだろうと思っていたのである。

我々の仲間で天気予報担当者であった十川君、五十嵐君は、あの時、北朝鮮から来た彼等が黙って

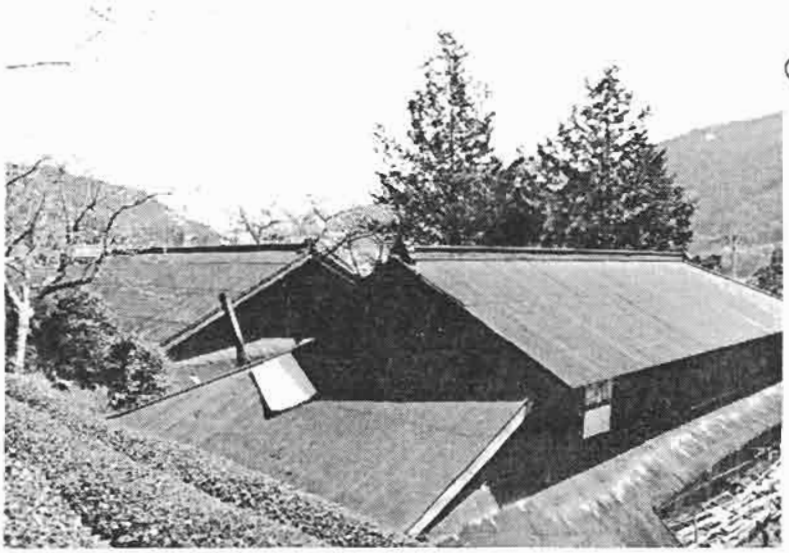
持って行ったに違いないとーた。あの『晴れマーク』紛失事件は忘れてくれたであろうか？。いささかとはいえ、仏門のみ教えを受けている今となっては、あの時のことをどうしてもそのまま隠し切れず『中川根ふる里通信』を借りて白状した次第。

在職中の事は、定年までと言うが、定年をとっくに過ぎた今は、安逸の事はお浄土まで持って行かないよう、身を綺麗にしておこうと、つくづく思う今日この頃である。

一九九八・一・一四　記

写真①

②



写真説明.

①.②は、高郷に現存する、P10の家。この大きな家は、始め『みなみ』屋号の小沢栄作さんが建てた青年学校、昭和30年代は、中川根中学校の先生の独身寮、と、久保尾の原山地区の生徒の冬期学校寮に利用された。多くの人々と接した、たたずまいは、高郷地区の変遷をみているかの様に思える。

③④は、強制労働で出来た水路橋(長尾川)、今も、内部には、大井川本流がはげしく流れている。

③

④

ふるさと夜話
『あのう』『えいと』等の感動詞を考える

原田耕作

あのう、あのさ、あれさ、えいと、えいと、何んだっけ、あのう、そうそう、そうだっけ、ねいほい、ねいほいあんた、えいと、あのう……。

右に並べた文字を読むと、一体こりゃ何んの事かと怪訝に思うでしょう。しかし直ぐこれは私共が日常使っている言葉ということに気付かれるでしょう。

私共はふるさと川根で幼い時からこの言葉を聞き、この言葉を使い、現在も日々意識せず使って生きていることに気が付くでしょう。

数年前から私は「あのう」「えいと」と言う発音について妙に興味を感じています。つまらん事に興味を持ったものだと、他人は笑うでしょう。考えてみると全く馬鹿馬鹿しい事に興味を持ったものだと自分でも思いますから他人が笑うのは当然と思います。私が興味を感じたことは、人々の談話の中で「あのう」と言う発言を連発する人と、全く「あのう」を言わない人がある事に気付いたからです。

私は「あのう」と言う発音は、この歳になるまで言葉とは思って居ませんでした。言葉では無いが言葉の中へ入れて話をすると言うことはなぜだろう。私にとって永い間の疑問でした。そこで思い切って、過日、中川根の尊敬する三人の元先生方に、「あのう」の意味について御教示を頂きたいと電話いたしました。聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥という昔からの言葉を思い出したからです。

御教示を仰いだ三人の先生の内、上長尾の御一人の先生は早速お電話で解説を頂きました。そして恐縮したことに直ぐまた御手紙を下さって、懇切に御自分のお考えも述べて下さって、最後に辞書を読めとの御言葉でした。

下泉の先生は、御仕事中、小学館辞典を御持参下さって、これを御覧になれば判ります、と言う事で恐縮致しました。

私は恥しいことですが、「あのう」と言う発音が言葉として、辞書に載っているとは毛頭思って居りませんでした。私も数冊の辞典を持って居りますので、辞典全部調べてみたところ、全くお二人の先生の申される通り、感動詞として、どの辞典にも載っていることを知りおどろきました。最近刊の言語学者金田一春彦先生の日本大辞典にもはっきりと書かれてあります。「あのう」はまさしく日本の言葉でした。

辞典に依ると「あのう」と言う言葉は、「適当な言葉を思いつかない時、即ち、すらすら話のできない時にさしはさむつなぎ言葉、遠慮して話しかける時に使う言葉、親しい人に呼びかける時の言葉、

等、其の時々にいろいろ変化する言葉」であると、書かれています。

「あのう」と同様に「えいと」も随分多く使われていますが、これも辞典に依りますと、思い出そうとする時、考えをまとめようとする時等に使われる感動詞となっています。「えいと何んだっけ」などと、常に使われています。

「あのう」も「えいと」も使わなければならない言葉ではなく、改った講演などの場合は「あのう」を連発すると講演の品位が落ちる様に思われます。講演は漫談、講談の話芸ではありませんから。

国会のやりとりなどで舌鋒鋭い質問も「あのう」の一言を入れると、舌鋒の鋒先がにぶってしまうことがあります。質問でも答弁でも下を向いて物を言う人は決して「あのう」という言葉を使いません。下を向いて質問をし、下を向いて答弁する人は、必ず誰かの書いた原稿を棒読みしているわけで、その原稿には「あのう」なんて書いては無いからです。

テレビ、ラジオで聞くアナウンサーの言葉には、まずもって「あのう」を聞きません。しかし例外無しとは言いませんが。

時々テレビで聞く淀川長次先生の映画評論の弁舌には敬服致します。原稿棒読みの人でもあんなにスラスラペラペラ喋り得ることはできないだろうと思われます。「あのう」などさしはさむ隙は無い急流さながらの弁舌に敬服致します。

「あのう」も「えいと」も身に沁みた川根のふるさと言葉で私共はこの言葉に依って人間として成長したわけですが、しかしこの言葉は日本の一部のものでなく、全国に渡って使われる言葉故に辞典に載っているものと思われます。だが、私のいささかの疑問は、東北地方のズーズー弁、九州のバッテン弁にも「あのう」という言葉があるのか無いのか、「あのう」の代りとして別の言葉があるのか無いのか、と言うことが疑問です。

「あのう」「えいと」の感動詞は、これをはげしく使うと、その人を指す別称になることがあります。私はあのうさんと言う人は知りませんが、「あのう」を「あいだー」「あいだー」と言うために、「あいだーさん」と言われた人があったことを知っています。「えいと」を連発するので「えいと」さんになった人もあります。「ネーほい、ネーほい」と主人が常に人に呼びかけるため、いつの間にか店名が「ネーほい」となった店もありました。まことに面白い感動詞です。

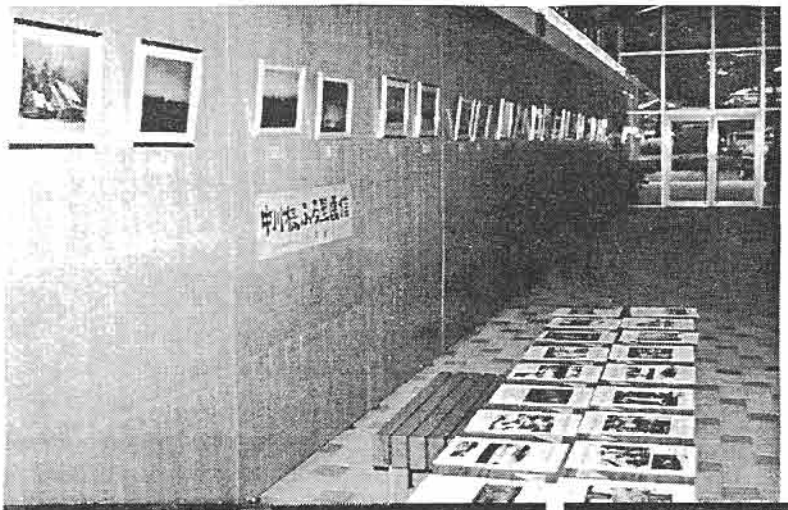
しかし、日常使う感動詞は気付かずして、生きの身の喜怒哀楽にもつながる言葉であることを知って居たいものです。

ふる里通信へ私がふるさと夜話として平成五年二月第一話を書いて、今回が六年目二十一話になりました。毎回題材は自分の

考えで選びますが、内容については書物にも頼りますが、若かった日、当時の古老達から耳にした古い話、伝説、自分の体験、そして親しくお聞きすることの出来る知識人のお言葉に頼ります。今回も元先生方お二人の御扶けに依ってこの稿が書けたことを附記致します。

「あのう」とか「えいと」とかの言葉は、誰との対話にも無意識に使っていますが、これが手紙となるとそうはゆきません。もし、この言葉を入れて、手紙を書いたなら、おかしなものとなるでしょう。しかし、親しい人への手紙には、「あのう」を入れたら、一層人間味豊かなものになるのではないか、と考えながら筆を置くことに致します。

ふるさと夜話　第二十一話　終



中川根町役場の町民ギャラリーに、5月展示物として、中川根ふる里通信が展示されました。
創刊号から、48号まで、手に取って、見ていただきました。同時に、町内の写真も見ていただきました。

暖冬、湿潤、晩霜害もなく、お茶の成育に好条件の気候に恵まれて、茶産地中川根の一番茶期は終りました。新芽も大変良く出そろって、久々に見る良質のお茶がとれたようです。四月二十五日前後から摘み取りが始まり、五月十日にはほとんど終了しているという、短期集中型の茶期となったようです。特に兼業農家は、ゴールデンウイークを有効的に活用出来たラッキーな茶期でした。おいしいお茶をいっぱい呑んで、元気になってほしいですね。お茶は薬効効果の高い飲みもの、未だ未だ需要は増えそうです。川根茶産地の本場の味を是非味わって下さい。最早、茶時、一大事の良き時代はすぎてしまって、茶時は超特急でなしとげる時代になってしまった様にも見えてなりませんが……

お茶にとっては、好天となりました気象条件も、自然界ではほとんどの植物の発芽、開花が例年よりも半月以上も早く異常気象となっているようです。

アカヤシオもシロヤシオも早い開花と雨に打たれて美しい姿を見られた人はほんのわずかでした。しかし桜の花は見事だったです。特に徳山、桃ん沢両岸のソメイヨシノ、川根高校のしだれ桜、川根育苗場の雪柳と百花繚乱の美しさでした。

地球温暖化には、氷河期、間氷期の地球規模のサイクルがありますが、どうも今期の温暖化現象には人為的な要素が大きいようですね。化石原材料は禁断の木の実だったのでしょうか。私達はより豊かな生活を求めて、より楽な手段を使って、必要以上に買い求めて、自分では浄化出来ないほどのゴミを出す生活習慣が身についてしまいました。そして、空気を、大地を、川や海をよごしてしまったのですね。まだ手おくれではないと思います。中川根町でも、ゴミの分別には真剣に取り組んでおります。そして、一人一人が今、何をしなければならないか、真剣に考えなければならないと思います。

もうすぐ五十号となります。早いもので、十二年がすぎました。五十号は特集号にしようと考えております。ページ数も増やして、皆様よりの寄稿を中心に発刊したいと考えます。どうぞ、よろしくお願いします。

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部　〒共150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回の発行(季刊誌)を予定しております。今回で購読料の切れる方、初めてふる里通信をご覧になられる方には、郵便振替用紙を同封致しますから、引き続き、ご購読をお願いします。

誠に恐縮ですが、50号より1部200円とさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。

購読を止めたい時や、住所変更のおりも是非ご連絡下さい。

郵便払込通知書、00870-4-81556
加入者名、中川根ふる里通信係
ふる里通信に関する問い合わせ・及・
発行責任者　〒428-0313
静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6
小沢節子
TEL、0547-56-0015